人生画帖

石川達三

人生画帖
石川達三作品集第四巻
昭和四十七年八月二十五日発行
昭和五十一年十月三十日四刷

定価 九〇〇円

著者 石川達三
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部〇三(二六五)五一一一
編集部〇三(二六六)五四一一
振替 東京四―八〇八番
印刷 東洋印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社
装画 下田義寛

© by Tatsuzo Ishikawa 1972 Tokyo
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

母系家族　5
人生画帖　201
解題　383

人生画帖

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

母系家族

一

応接室は十畳ばかりの広さで、落着いた紺色の洋家具がきちんと置かれ、窓に寄せて大きな事務机が据えてあった。窓は大きくて庭の新緑の光が机の上にあふれ、この部屋のあるじの性格の明るさが思われた。鮫島まさ代はこの部屋でしばらく待たされた。

「三時に帰ることになって居りますので……」と、さきほど玄関で応対に出た母親らしい人が言った。書棚の上の置時計は三時四分まえである。彼女はいら立っていた。いずれは二十分も三十分も待たされるに違いない……。そればかりではなく、初対面の弁護士にむかって、恋愛の破綻、結婚問題のもつれ、子供の処置、そうした私生活のうちあけ話をすることの見すぼらしさがたまらなかった。

一方の壁に造りつけの大きな書棚があって、天井までぎっしりと本や書類が入れてあった。

民法最近判例
親族相続法判例全集
最新法学全集
民事訴訟法精義
母子保護法研究
憲法新解

中段にはそういう本の金文字がぎらぎらしていたが、上段と下段には訴訟や裁判の書類が重ねてあって、「調停成立」とか「民訴」とかいう墨の文字が見えていた。自分がいま当面している事件もまたこういう書類になって、この書棚に積まれ、何年も恥を晒すのかと思うと鮫島まさ代はしきりに腹立たしく、しかもさびしかった。

扉にノックする音が聞えた。彼女ははッと反射的に立ちあがり、スカアトの襞をなおした。しかし外の人はすぐにはいって来ないで、喫いかけの煙草を灰皿に消すだけの時間があった。それからゆっくり扉が開いた。婦人に対して大変に礼儀正しいやり方であった。

長身の、やや骨張った白い顔、きちんと紺色の背広の前ボタンをかけて、案外に若い弁護士であった。彼は長い足で大股にはいって来ると、赤革のふくらんだ鞄をかかえたまま、

「どうもお待たせしました」と言ってすぐ置時計に視線を向けた。それに誘われて鮫島まさ代も時計を見た。三時かっきりであった。この部屋の印象から考えても、こ

の人の態度から見ても、大変に規律立った性格をもっているらしかった。

高村晞三は事務机のまえに立ったまま鞄から書類をとり出し煙草を咥えた。まさ代はその後姿を見ながら、落着きはらったこの男の態度から何か圧倒されるものを感じていた。

彼は机の抽斗から封を切った手紙をとり出し、ふり向いて言った。

「鮫島まさ代さんでしたね、あの、山根英太郎さんから御紹介のあった……」

「ええ、そうです」

彼は手紙を読み返しながらまさ代と向いあって坐った。女のようにしなやかに長い指をしているのがまさ代の眼を惹いた。

「大体の事柄は紹介のお手紙でわかりましたが、訴訟の相手になる竹内夏雄という人との、知りあった動機とか、事件の……事件というのもおかしいですが、その経過ですね。それを少し詳しくお話し願いたいですね。およそのの見当をつけなくてはなりませんので……」

詳しい事をききたいと言われると、鮫島まさ代はうつ向いて躊躇った。どうせ弁護士などと言うものは訴訟に勝っても負けても損はしないものだから、冷淡な事務的な聞き方しかしないにきまっている。そういう人に向って、自分が命がけで恋愛し血を吐く思いをして苦しんだ、そのときの厳粛な気持などを話してみても、理解して貰える筈はないと思っていた。

「わたし、詳しい事はお話ししたくないんです」

彼女は眉を上げてきっぱりと言った。今更ながら事件の解決を弁護士に頼もうとしたことを後悔していた。

高村晞三は煙草のけむりの中からほのかな笑顔をむけた。まるで彼の方が何か恥ずかしがっているようなやわらかい微笑であった。

「御尤もですね」と彼は静かに言った。「こういう事は、謂わば御自分だけの秘密なんですからね。しかし訴訟なさる場合には感情的な問題が多いわけですから、非常に微妙なところで有利になったり不利になったりするものでしてね。まあ、お嫌な点は避けて、差支えない所だけでも話して頂かないと、訴訟が成立するかどうかという事もありますからね」

「それは解っていますわ」

まさ代は高村の言い方がまるでわからず屋の女をなだめているように聞えたので、負けない気になった。落着き払った相手の白い顔が憎らしくさえ見えた。

「だったら、何でもお話しますわ。どういう点がお聞

きになりたいんですの？」

高村はちらりと彼女の顔を見て笑った。

「何だか叱られているみたいですね。……では一つお訊ねしましょう。相手の竹内夏雄さんは現在どの位の収入がお有りです」

「月給が百三十五円。ボーナスなんか入れて平均百七十円位です」

「資産はどうでしょう」

「別に何も無いようです。貯金はいくらか有るんでしょうけれど」

「奥さんと子供が一人ですね」

「ええ」

「で……あなたはお子さんの養育費としてどのくらい請求するおつもりですか」

「月三十円ずつ位も取れたらいいと思っていますわ」

「解りました。……それから、大事な点ですが、竹内さんに妻子があることをあなたは知らなかったんですね」

「知っていました」

「ほう！　承知のうえで……」

「ええ！　そうです」

「すると、どういう結果になるということをお考えになならなかったんですか」

「わたしそんな馬鹿に見えまして？」

「いや、失礼しました。では、どうするおつもりだったのです」

「まるでここが裁判所みたいですのね」

鮫島まさ代は相手の質問の出鼻を折って皮肉に笑った。笑いながら椅子の背に反りかえり、ふてぶてしく天井を向いて、ストッキングの膝を組んだ。自分で図々しさは承知しながらハンドバッグから煙草を出して火をつけた。そしてじっと返事を待っている高村弁護士の頭から浴びせるように言ってのけた。

「わたし、本当はその男と結婚してやろうと思っていたんです。何が何でも結婚するつもりでしたわ！」

そこまで聞くと高村晞三は、これは訴訟にならないかも知れないと思った。竹内に妻子があることを承知で接近し、何が何でも結婚しようとしたのは、彼女の方から誘惑したことになりそうだし、それでは養育費を取るという訳にも行かない。

これは利口な女であるらしいと彼は思った。しかし利口にまかせて他人を軽蔑しすぎているようなあさはかさも感じられた。

「どうも、そういう場合の女の方の気持が、よく解らな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いのですが、恋愛であるからには致し方もないのかも知れませんが、何か少し自暴自棄という風な、そういう気持でも有ったのですか。何か他の原因で……」
「有りましたわ」と彼女は答えて、煙草をぎりぎりと灰皿に揉み消した。紅の濃い唇を屹と噛んで、
「いくら私が馬鹿だって、恋愛する時には独身の男性を選ぶべきだぐらいのことは知っていますわ。選りに選って竹内さん……とあんな事になったのだって、良い事をしたと思っては居ませんわ。お話しすれば長くなるし、先生がたに解って頂けるとは思いませんけれど……でも、一応お話ししますわ。
竹内とあんなことになる前、私はざっと二十人ぐらいの男の方と次から次へつきあって行ったんです。勿論独身者ばかりよ。二十四の時に結婚しようと思って、それからまる二年、そんな男性たちとつきあって、男性というものをよく研究したんです。先ず男を知るためには酒を呑む社会を知らなくては駄目だと思って、酒を呑む稽古をしましたわ。そして酒場でも待合でも料理屋でもみんな行って見ました。それで私のつきあった二十人のうち、十六人までは私に求婚して来たんです。私はみんなことわってしまいましたの。そのために、或る青年は私の眼のまえで毒薬の包みを見せて、結婚してくれなければ死ぬと言って脅かしたりしたんです。だけど、そんな人たちと結婚するなんて、馬鹿々々しくって、考えられなかったんです。私が、この人なら結婚してもいいなーと思った人が五人有りましたけど、調べて見るとみんな家庭をもった人なんです。その五人目が竹内さん……でしたの。先生がおっしゃるように、私はほんとに自暴自棄でしたわ。いくら探したって独身の青年のなかに理想の人なんか居やしない。みんな軽薄で、ちっとも落ちつきが無くて、口先ばかり達者で……それだから私は、もう仕方がない、自分の生涯を託するに足る人なら、家庭のある人だってかまうもんかという気になったんです。勿論こんな考え方は無茶ですわ。無茶は知っていますけれど、独身の青年なんて、凡そくだらない存在なんですから、已むを得ないと思うんです」
「ずいぶん独身者をこきおろしますね」
高村はやはり微笑していた。この女の行き過ぎた物の考え方がわかって来ると、むしろ幼稚な事件だとさえ思った。
「こきおろされても仕方がないんです」
まさ代は言い終った疲れを見せて、ふと思い沈んだ様子であった。
「そうですか、僕も独身者のうちですがね」

高村は呟くような言い方をした。気がつくと、鮫島まさ代の刺すような眼がじっと彼の顔にむけられていた。

こういう鮫島まさ代のような女は、高村に取って珍しくはなかった。民事事件のうちの主として離婚問題とか慰藉料請求とかいう事件を多く扱っている関係から、女の依頼者も少なくなかったが、その種の事件をひき起して来る女たちの大部分は、どこか行き過ぎた考え方を固執していて、そういう自分の考え方のために自分を不幸におとし入れているというのが多かった。しかし、その愚かさを愚かさとして見棄てておけない所に社会問題があるのだと彼は思っていた。

「大体のお話はわかりましたが、これは少しむずかしいですね」

高村はこの事件によって訴訟を提起する興味はまるでなかった。それよりもこの女の行き過ぎた考えを元に引き戻してやる事ができれば、それが一番いいと思っていた。

「事件の性質として養育費請求は少し無理です。まあ、両者の示談が成立して毎月三十円の仕送りが取れたとしてもですね、結局あなたに取っても詰らないと思うんです、僕は。……そうでしょう、金を取れば、あなたの過失は過失として、汚ないものになる。汚ないと言っては失礼ですが、悪い思い出になります。あなたの失敗を証明して見せるようなものでしょう。それはもうさっぱり忘れてしまう方が後味が良くはありませんか。先方に責任を取らせるというと、あなたが馬鹿にされたことになるし、あなたが御自分で責任をお取りになれば、小さな過失というだけで終るんです。それよりは、僕はそう思うんですが、過去は過去として忘れてしまって、意地ずくになるのはやめて、新しくあなたの生活を築いて行かれるんですね。その方が利口です。第一、まあ一つの例としてですが、あなたが今後結婚しようという場合があった時に、お子さんに養育費を取って居られると、それだけ窮屈な立場になるわけでしょう。訴訟したって詰りませんよ。今までの例から見ても、訴訟で勝ったという女の方は、そののち幸福になれないようですね。その当座は腹を立てて訴訟しても、一、二年のちにはみんな後悔していますよ」

「わたし、自分はどうだっていいんです！」とまさ代は大きな声で言った。「私は何も養育費なんか欲しくはありませんわ。ただ、あんな無責任な男を社会が処罰しないのが腹が立つんです。だから大っぴらに恥をかかしてやりたいんです」

「向うは恥をかくでしょうが、御自分も恥をさらすこと

になると困りますからね」
「困りませんわ。私なんかどうなったっていいわ」
こういう女に手を焼くと、高村はきまってゆっくりと煙草を咥え、興奮の静まるのを待つのであった。
扉にノックする音がして高村が答える前にさっと開いた。
「あら！　失礼しました」
華やかな声にさそわれて二人がふり向いた。
「かまいませんよ。何です？」
腕まで出た水色のワンピースを着た二十四、五の女がはいって来た。
「会計の整理が出来ましたわ。それからこれ、タイプを打って置きましたけど……」
高村は帳簿と書類とを受取った。そのあいだ、鮫島まさ代の視線がその女の頭から靴まで、隙もなく眺めまわして居た。
高村が書類をひらいているあいだに、その女はふり向いて、鮫島まさ代と視線を合わせた。未知の二人が偶然に視線を合わせたときには一方が避ける筈であったが、この二人はじっと眼を見あったまま動かなかった。まるで敵同士のように、憎みあっているようであった。最初の一瞥から何か本能的に反撥するものを感じあっていたのである。二人とも美貌ではあったが、まさ代は相手の方が若くて完全に独身であることを感じていた。体格はまさ代の方が優れていたが、相手のからだつきにある豊かさとしなやかさとを、彼女は持たなかった。
「あとで行きます」と高村は軽く言った。
それで女は靴を鳴らして出て行った。
「あの方はどなたですの？」
「秘書です。……ところで……」と、彼はすぐに話を転じた。
まさ代は、この二人の間には特別な感情のつながりが有るらしいと感じていた。そういう直感がいつも彼女をいら立たせているのであった。
「どうしても訴訟なさるというなら致し方ありませんが、僕はおやめになることをおすすめしますね。それに勝ち目もありません。失礼ですが、経済的にはお困りにならないんですか」
「働くつもりだわ」
「結構です。お子さんは小さいんでしたね」
「来月で誕生ですわ」
「どなたか預かってくれる人が有りますか」
「それが無いから働けないんです」
「そうでしょうね。そういう方が多いようです。僕は薫

風寮というのをやって居ますが、それへでもおはいりになったらどうですか。この寮というのは、まあ一種の母子ホームですね。子供のある女だけのアパートです」

「おことわりしますわ。私は社会事業というのは大嫌いなんです。死んでもあんなものの世話になんかなりません。まるで囚人を扱うみたいに、高圧的で、恩に着せて、規則ずくめで、貧民扱いして。……あんな所へはいる位なら死んだ方がいいわ」

しかし、気がついて見ると高村弁護士の白い顔がおだやかな微笑を向けて煙草のけむりに包まれていた。

「まあ、もう少しお聞きになったらいいでしょう。僕はそんな社会事業をやって居るんではありませんよ。ただ子供のために働けない女の人が多いので、おつとめの間だけ子供さんを預かってあげる設備をしているだけです。部屋代だって貰いますよ。六畳十円です。明るくって気持のいいアパートですよ。子供さんは一カ月五円でお勤めの間だけお世話をしてあげる。その他は規則なんか無しです。ただ他の人の感情を刺激しないために、男のお客さんは夜九時半までで帰って頂くんです。まあそこの窓から見て下さい。子供が相当さわいでいるようだが……」

高村は立ち上った。まさ代もそれに従って、彼のうしろに立った。窓のすぐむこうにコの字の形の、二階建に白壁青瓦の洒落れたアパートが有って、ぶらんこ、滑り台、砂場、噴水などのある庭で十人ばかりの子供がさわいでいた。のびやかな明るい風景であった。しかし次の瞬間、柿の若葉の茂った下にある白いベンチに坐ってじっとこの窓を見上げている女を見つけると、まさ代はぎくりとなった。

さっきの女であった。

高村弁護士は窓から半身を乗り出した姿勢で頬杖を突いた。

「なかなか良いでしょう？　家族的……というと通俗なんだが、本当に家族的なんです。つまりこの子供の遊び場を中心にした生活ですね」

「炊事は共同ですか？」

「いいえ、みんな勝手にやって居ります。僕は私生活には干渉しません。僕は何も監督者ではありませんからね」

「さっきの、先生の秘書のかたは、あそこで何をするんですの？」

「いろいろやります。事務をとったり、タイプライタを打ったり子供の世話をしたり、まあ薫風寮のマネージャですね」

「そうすると中の人はみんなあのかたの指図を受けるんですのね」
「指図なんか受けませんよ」
高村は笑ってふり向いた。
「あなたはあの人がお嫌いですか」
「あんまり好きでもないわ」
鮫島まさ代は思い切って正直に答えた。そして元の椅子に坐るとすぐに、
「では、先生は訴訟の方は引き受けないと仰言るんですのね」と言った。
「いや、そういう訳ではありませんが。ただお引き受けしても良い結果にはならないことを御承知願いたいんです。僕はおすすめしませんね」
「だったらお願いしませんわ」
まさ代は腹を立てていた。
しかし彼女は自分で知っていた。腹を立てても何にもならないのだ。いや、腹を立てるのは今の場合、贅沢なことであった。先ず生活の事を考えなくてはならない。子供をあずかって貰い、勤めも探さなければ、忽ち困る立場であった。彼女は高村弁護士の親切はわかっていた。しかし、困った立場に居るだけに他人の親切を素直に受け入れるのが余計に腹立たしい。彼女はもう歪められた性格になっていた。
しかし、ある種の疑問がふと彼女の心をかすめた。輝かしい疑問……。
この弁護士が、訴訟をやめて寮にはいらないかとすすめてくれるそれが、個人的な感情から出たものかも知れない、ということ。
かつては十六人の青年たちから求婚された華やかな時代もあったが、今は子を連れたみすぼらしい身の上で、求めても近づいてくれる青年は無い、その腹立たしさと淋しさとがまさ代の感情をかき乱していた。
「私はいまお友達の家に居ますの、好田という実業家のうちで、いつまで居てもいいと言ってくれるんですけれど、やはり他人のうちは遠慮ですからねえ。……先生のアパートにお世話になるかも知れませんわ」
彼女は嘘をついた。実業家のうちというのは根も葉もない嘘であった。弱味を見せて軽蔑されるのが何にも増していやであった。
「都合で明日でもまた部屋を見せて頂きに参るかも知れませんから……」
「そうですか、折角でしたが、その方が良いと僕は思いますね」
高村はまるで独りごとを言っているようであった。そ

の巧まない表現が却ってまさ代の胸にあたたかいものを残した。

彼は玄関まで見送ってくれた。

二

日が暮れて来たというのにまだ食事も済んでいない、病院へ見舞いにも行かなくてはならない、その患者の子供は眠たがっているだろうに、まだ事務の整理がつかない。今日は美容院へ行きたかったが、それも駄目になった。……最上葵は手を伸ばして電燈の紐を引いた。ぱっと帳簿が白く光って、窓の外が急にまっくらに見えた。それから背後の柱にある呼鈴を押し、ついでに背伸びをした。背筋が疲れにこわばっていた。

五十ちかいこの寮の小母さんがぴたぴたと草履を鳴らして事務室にはいって来た。食事のあと片づけでもしていたらしく、白いエプロンの胸が濡れていた。

「忙しいんですね」

「忙しくってたまらないわ。手伝ってよ、小母さん」

「私に出来ることならね」

「うん！　出来ることがあるの。八号室の依田春子さんね、あのひと入院だから、子供を寝せてやって下さらない？　児童室へ連れて来た方がいいわ」

「今から寝るかしら」

「寝るわ。あの子なかなか言うことを聞かないから何とかうまく言ってね」

「あんた、御飯はどうなさるの」

「うん、済まないけど、あとでここへよこして下さらない？　御飯は丼でいいわ」

「そう。あんたも可哀そうにねえ、若い身空で毎日忙しがってばかり居て……」

「いいのよ。忙しいのが好きなんだから」

丈の低い小母さんは肥えた腰をだるそうにゆすって出て行った。

葵は書類を持ってタイプライタの台に坐った。彼女は何でもやれる娘であった。薫風寮の仕事一切を引きうけて、午前中は事務、午後は学校から帰って来た子供たちの相手、夕方母親たちが勤めから帰って来ると子供を順次に引きわたして、また事務室の仕事であった。タイプも打つし算盤もはじくし、幼児のミルクの濃度から寮内の設備衛生、児童の昼食の献立てまでも指図して、そのあいだには高村晞三の秘書もつとめるという、多芸であり多才であった。

忙しいことには馴れていた。雑務を片端から処理して

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com